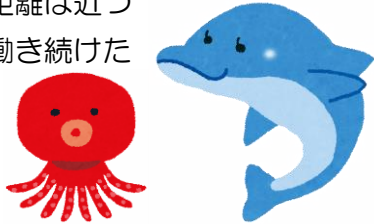


## 『水族館ガール』

木宮 条太郎／著 実業之日本社（2014年）

市役所に勤めていた由香は、欠員補充のため市立水族館アクアパークへの出向を命じられた。もちろん、水生生物に関する知識や経験はほとんどない。イルカの担当として働き始めたけれど、先輩は無愛想で厳しく、イルカからはなんだか舐められている気がする。仕事も一筋縄ではいかず、手は荒れるし、失敗もするし、水族館という施設の抱える矛盾と向き合うことにもなった。しかし、精いっぱい業務をこなすうちに先輩との距離は近づいて、由香は水族館で働き続けたいと考えるようになる。



## 『蜜蜂と遠雷』

恩田 陸／著 幻冬舎（2016年）

三年に一度開かれる若きピアニストの登竜門である、芳ヶ江国際ピアノコンクール。四人のコンテスト（出場者）たちを軸に予選を勝ち抜き本選に残るまでの物語です。舞台上で繰り広げられる熱演をジャッジする審査員、調律師、そして聴衆が息を呑んで見守ります。勝敗が下されていく中自分にとってのピアノとは何か、良い演奏とは何か、を自問自答しながら綿密な準備をし、本番に挑む姿に読み手側も苦しくなります。登場人物たちの回数を重ねる度に強くなっていく様子が感情豊かな文章で綴られています。



## 『ビブリア古書堂の事件手帖』

『栗子さんと奇妙な客人たち』

三上 延／著

アスキー・メディアワークス（2011年）

五浦大輔<sup>ごうらだいすけ</sup>は幼い頃の出来事がきっかけで活字が苦手になってしまった男性である。ある日、祖母の遺品整理をしていた大輔の母は、夏目漱石のサインが入った全集を見つける。このサイン本がどのくらいの価値か知る為、古書店に持ち込むことになった大輔は、そこで古書店の店主・篠川栗子<sup>しのがわしおりこ</sup>に出会う。人見知りで接客も怪しい栗子だが、本への知識と熱意はだれよりもあり、サイン本の謎をみるみるうちに解いてしまう。隠されてきた祖母の秘密が今、解き明かされる。



## 『ハリー・ポッターと賢者の石』

J.K.ローリング／著 松岡 佑子／訳 静山社（1999年）

両親が亡くなり親戚のダーズリー一家と暮らすハリーは、一家のみんなからやっかい者扱いを受ける毎日を過ごしています。そんなある日、ハリー宛に1通の手紙が届きました。ハリーが手紙を読まないよう阻止するダーズリー一家ですがとうとうハリーが11歳になった日のこと、大きな男の人が手紙を持って現れます。なんとそれは、ハリーの魔法魔術学校への入学を許可する手紙でした。

文庫本も図書館に所蔵しているので、ぜひお好きな方で魔法と友情の冒険をお楽しみください。



## 『総理の夫』

原田 マハ／著 実業之日本社（2016年）

20XX年9月20日、相馬凜子<sup>そうまりんこ</sup>は42歳にして女性初の総理大臣に選出された。鳥類学者の日和はファースト・レディーならぬファースト・ジェントルマンとして妻を支えることを決意。鳥を観察することで養われた目線<sup>くし</sup>を駆使し、妻の奮闘の日々を決して忘れまいと日記を書くことを決意する。総理との馴初め<sup>なれそ</sup>、出馬、どす黒い政治のこと。総理の夫となったその日から日和までもが外出はままならず、常に監視され、ファンに追っかけられ、拳句の果てにはスキャンダルに巻き込まれた。日和が未来の読み手に語りかけるよう日記は続く。



## 『准教授・高槻彰良の推察 民俗学かく語りき』

澤村 御影／著 KADOKAWA（2018年）

幼いころの奇妙な体験を経て、人のウソがわかるようになり孤独になってしまった大学生の深町。なんとなく受講した「民俗学Ⅱ」で准教授の高槻に気に入られる。深町は、怪奇に出会うとテンションが上がって周りが見えなくなる高槻の常識担当兼ストッパーとして助手のバイトをすることになる。高槻の助手をするうちに、高槻の瞳の色が時々青色に変わることや超記憶能力を持っていることなどを知る。実は高槻もまた、幼いころに奇妙な体験をしているのだった。

